

H22.4.21 (水)

安全なお産地域で守る

妊婦健診は診療所で、分娩は病院でーと、医療機関が連携してお産をサポートする「セミオープンシステム」。中国地方でも導入する医療機関が増えている。医師不足が続く中、病院の産科医の外来負担を軽減し、安全なお産を地域全体で守ろうとの取り組みだ。

(治徳貴子)

どうする

地域医療

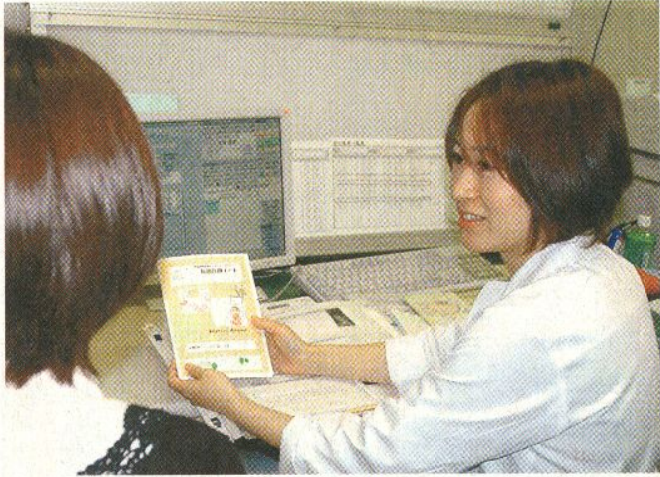
セミオープンシステムするため、厚生労働省は、妊娠中期までのも後押ししてきた。妊婦健診は最寄りの診療所が担い、出産が近づいた段階の健診や分娩を病院が受け持つ仕組み。診療所の医師が病院に引き、分娩まで立ち会う（倉吉市など2病院がオープンシステムと導入が進んでいる）。

中国地方でも導入進む

産期診療部長（52）。今年に入り、1日に

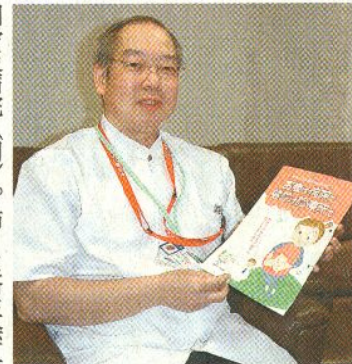
診療所で健診 病院は分娩 セミオープンシステム

呉市では市医師会発行のノートが病院と診療所、妊婦を結ぶ（呉医療センター）



産科医不足で、分娩を扱う病院や産科の閉鎖が進む中、病院に負担が集中するのを緩和

2008年以降、セミオープンを取り入れた国立病院機構呉医療センター（呉市）と中



「健診を最寄りの診療所で受けたい」と話す小林部長（浜田医療センター）

国労災病院（同）。市内の8カ所の診療所と連携する。平均14回の妊婦健診のうち10回を診療所が担当。病院が受け持つ健診は4回程度に減ったという。呉医療センターで昨年、7人の医師が扱った分娩は925件。分娩以外にも、婦人科の手術や抗がん剤治療、外来、当直勤務をこなす。「導入によって医師の負担が確実に減り、妊婦の安全にもつながっている」と水之江知哉産婦人科長（51）は強調する。

同センターと診療所は情報を共有するため、市医師会が作成した独自のノートに検査結果などを記入し、連携力を入れている。受診した市内の女性（36）は「診療所での健診では、ノートに詳しい検査結果や注意点を書いてもらったし、出産は病院なので安心感もある」と理解を示す。

周知を目指す

国立病院機構浜田医療センター（浜田市）

浜田医療センターの小林部長は「妊娠した段階で『まず診療所へ』と思ってもらえるように、機会あるごとに説明していきたい」と話している。